

読者が創る雑誌「医療」

国立病院機構東京医療センター
人工臓器・機器開発研究部長
角田 晃一

私が前回、余滴を書くチャンスをいただいてからその後4年がたつ。かつてはIndex medicusにも載っていた「医療」であるが、なかなか復帰は難しいことも判明し、学術誌の形態を保ちつつ、医師のみならずより多くの職種を対象とする方針に変更された。それにともない、様々な新しい企画や研修医を対象としたカンファレンスなど、より多くの情報を含んだこれまでに類をみない、新しいタイプの雑誌として生まれ変わりつつある。これは大きな変革を決意実行された、鈴木紘一、湯浅龍彦の歴代編集委員長と、白井宏現編集委員長のそれぞれの適切な英断の賜物である。

多くの医学雑誌は国内外を問わず各個人や施設が購読する購読料と広告料により成立している。世界のトップジャーナルに目を向ければ、Nature、Lancetは商業誌であり、そのほかの多くの雑誌は各団体が発行している。JAMA、BMJは医師会誌である、NEJMは歴史的にハーバード大学系の雑誌であり、Science、PNASは学術団体誌である。各団体はそれぞれよい論文が、その雑誌の客観的評価の指標としてのIF（インパクトファクター）を上げるために会員以外にも門戸を広げている。これらのTop Journalは世界中の大学、医局、図書館はもちろん、それぞれの会員の会費や購読料で支えられているが、IFが高ければブランドイメージが高くなるため、大新聞同様に広告料も入り雑誌の運営は円滑になされる。本来雑誌の評価であるこのIFが個人の評価にも使われるようになり、多くの医師はできるだけIFの高い英文誌への投稿を模索する。その結果、水が高きところから低きところに流れる

がごとく、多くの国内の学会誌は年々薄くなってきている。雑誌にIFをつけるのは大変な努力と時間が必要で、まず英文誌であることは必須で、海外の英文誌でもIFがついていない雑誌も多い。

「医療」は皆様読者の購読料で成り立っており、本誌も門戸を広げて購読者以外の先生方からも多くの投稿がある。理由の如何を問わず、せっかく購読料を払って購入している雑誌である以上、読者の多くの意見を取り入れ、旧国立病院以外の多くの国内施設から広く愛される医学総合誌に成長すれば、購読料も決して高くはないはずである。国内の雑誌を見渡した場合、すべての医療従事者を対象とした、学術、教育、研究、情報交換などすべてをみたく「真の医学総合誌」の候補は、「医療」をおいて他にありえない。逆に、この機会に是非皆様ご自身の経験にもとづく、「知ってもらいたい、試してもらいたい」などの検査、診断、治療、看護、リハビリテーション、教育法、事務の工夫やチーム医療としての工夫など、どんどんLetter to editorなど手紙形式での掲載も利用した投稿をお勧めしたい。Natureも創刊時はLetter形式から始まっていると聞く。

誰でも最初を書く論文は症例報告が多い。症例報告を低くみる人もいるが、基本的に症例報告はすべての研究の始まりであり、AIDSもピロリも症例の報告から始まっている。参考に、私の拙い経験からTop Journalに症例報告する際の簡単なコツを、本誌の最も多い読者である若い臨床医にお伝えする。

まず、1) 症例報告はすべての臨床科に均等に与

えられたチャンスであり、その病態の重要性に気づいて論文にした者の勝ちである。2) 新しい発見、つまり教科書にない病態や、聞いたことがない病態、常識を覆す事実に出会ったら、自身で考え、解釈をまとめる。3) 同様の病態をPubMedで調べる。

もしPubMedで同様な事実がなければチャンス到来である。執筆に当たっては、手本として、NEJM, Lancet, Annals Intern MedのCase Reportやletter, Image in clinical Medicine, Clinical Picture, Correspondenceなどを分析しつつよく読むことが大切である。症例報告は150-600wordsの制限がある。したがって、必ず編集長宛のカバーレター（これには制限がない）には、本文に字数の関係で割愛した事実を裏付ける多くの情報を載せる。基本的にTop Journalの編集者は細かいことを求めず重箱の隅をつつく野暮なことはしない、新奇性と独創性をともなった事実がすべてである。英文専門誌や和文の症例報告に書きなれた人は難しいかもしれないが、間違いのない高校レベルの英語で、会話で相手に語りかけるように、事実を1点にしほり考察する英文を書く。どんなに英語に自信があっても、英語のNativeチェックに出して英文を直

してもらおう。

この際、1例報告が原則であり、考察の長さは全体の4分の1が原則である。

最後に、私の分析では海外医師会誌の場合、コネのない日本人が日本人のみで載ることはほぼ不可能に等しく、逆にIFの高い商業誌などに多くの日本人の独創的な論文が掲載されている。商業誌でありFairな立場から、国籍、ポジション、政治に関係なくよいものは必ずとる訳である。逆にダメな時は、学会誌でもダメな場合がある。その時は、ひとまず日本語で「医療」に投稿し、さらに研究を重ね、次のステップで再度Topを狙うことをお勧めしたい。

同じ症例を診ても気づく人と気づかない人がいる。海や山で遭難した人を探すのに船や徒歩で捜すと同時に、ヘリコプターで空から3次元で探すと効率上がる。日頃から、肩の力抜いて他科、他職種、他業種など関係ない領域の講演は積極的に参加し、なにげに新聞、テレビ、ラジオなどにも接することで、臨床に応用できる様々な新しい解釈やアイデア、ヒントが浮かぶものである。